



歸菴漫筆

貳

陸  
六  
二

15  
348  
2



門 5  
號 348  
卷 2

東 瀨 子 卷 二

東瀨子卷二

此は朝の儀の國より唯質実の事と欲して其を  
婦人が故に國晏く氏堅く其の衣服をとりて其を  
法として其に武家にして其の儀をとりて其を  
肩衣袴をたぐと下と云佩刀差込を大小との唱へ  
上下大小との武家儀初に衣服佩の條表調り元來  
宗廟の芽着けをたぐとみ質朴とみ其の教柄其の  
是れ奢んしと寧儉せよとの聖語と侍りて神の教育  
半見のたぐり此の用と和と考へて大に和く國風を

東瀨子卷二

文教

明治卅六年十一月五日

東京 平内雄藏

平内雄藏氏藏





新と刻し牛の刀を用ふつてさう按るに字書に鉉の賣也とありは拙くは婦とて賣婦とに之を以て之と云ふ也  
法妻の衛妻ありは東都にて傾城守との所賣と内者女衛と云ふも街と傳たりはなり

○世に存星の盆と云古名有て保赤とこれと目利と云と存星の盆出来或は後出来たりと鑑定は存星と器物の作通の名と是はる所なり此の東の張成之盆の地面小星の盆をこれと存星と稱と張成古今の細工なりとて南都土門氏所傳之稱は存星の盆なり是は東の殿法所傳之盆と云ふを傳来は之稱は西渭徐縣の路松原府傳存星の盆と

此の張成して下西とる麟之圖を許由瓢と稱る處とて土門氏の筆記の寫を友人南都の安埋和の元りて是傳る  
○漢真多賀城の碑は中古を元土中に埋きて年々之を知りて之に浮邊の古村の巨木に巨萬の材を費し之を城郡八里に方と地下五尺に掘せらして後に城垣り之を掘出せし處に居る今其城郡市川村と云に有碑文暨石の版たさかど清書に出たこと爰に贅せば之れは漢の秦漢の書ありて中朝の事と云稱くの矣後多し或は漢の漢守府は方碑と云はて然も法守府の懸漢郡なり城守と云ふは城郡之む惠更の朝籍と云人再貞のより碑文に





丹枕渡寫



しりや清と人た七食とゆくとを木恋りし

○中地打の児事の戯の清家筆記の和海信小周陳と書

つらまわり今も浪花を禊島と云はる中地打を

せり東陣の小思柳の枝と造り中地の栞とらん

の栞と造りて栞とるに制栞のまへ麻皮と栞と栞と

をとり取の菱形を剥身のまへふ皮とびたて白

本とせり平初れ頂とらんぐけ棒とて上巳端午ホ

くは脱物とせり之来大打ちと大退物と戯擬せりしと

○うふまの字の國字とて○禁裏は何の様の字と

なぐは此と陳のあり方の字書とてとら

○柳とみどりとふの和いしと對とて燒の謡曲とゆふ

ひらの結語の体相の終章なりと云はるなりと

たまゆりしに和海信小西の法師のいしと武士の道枝

かして武士とふり和事の道枝とて和弁小かり方の道

枝とる方に布をうら孫とて道の道とては云はるげた

和い柳とみどりとふの和いしと對とて燒の謡曲とゆふ

とて燒の謡曲と柳とみどりといふなりと云はるなりと

○柳の精秀をばりしと英と云獸の群と特ありしと雄と

云故よとの文武は異るばると名づきて英雄と孫聰明秀出

と英と云膽力人よとてを雄とてとし揚填が丹治原出



○河地赤丸之筋徑の真治を絹局として一統の定まりあり  
 定文年中長濱(黒坂)着岩に制介(壺船)焼討に付  
 火をうけ焼付しとなりまは初ら船来せし結の故を忠  
 かくしをうけをまひしとて長濱(壺船)の盛ふりて用らる  
 ぬ  
 ○年内まゝ和方とて春より連排しての定まりあり  
 了牡丹とて月々霜後いろばく初楓を之杖にせんと  
 古人をさわりしは汝汝のあはれとてまはるぬと  
 乃  
 ぬやうみかさるるにせしは書を定むりし容易なる  
 るに似せんと白去の用於懐紙一巡の是度一風花を

月(配)通(り)もまゝとて原長(た)もどごと七排(入)権者(ハ)ま  
 け(河)軍(ノ)ふ(ひ)は(と)れ(原)とい(は)れ(し)とて今(ハ)彼(レ)も(足)も  
 する(ま)て(ノ)書(ト)編(て)雅(名)を(獨)り(將)領(後)より(傾)城  
 と(る)より(て)率(を)せ(び)ら(と)い(は)れ(し)とて今(ハ)い(は)し  
 古(式)も(身)に(先)達(の)波(と)霧(と)を(内)社(と)た(に)と(る)と  
 之(一)古(子)古(方)古(半)後(古)の(こ)も(し)小(排)滑(り)後(と)流  
 け(と)る(に)は(と)内(を)患(の)事(れ)や(い)し(西)海(も)は(れ  
 だ(内)の(を)信(俗)不(變)也(後)世(ノ)か(つ)か(と)牡丹(餅)雜(か)れ(と  
 殺(の)こ(ふ)と(て)七(月)の(一)牡丹(餅)送(り)し(と)七(月)交  
 せ(り)の(負)志(折)と(孫)城(後)柳(ノ)二(百)去(る)に(湯)豆(腐)ハ(南

海守の景物ふとて櫻散花と藤とを付くと能ひるなり  
南福寺の下にそと人集ふんがさるるに神杖二つあり下  
かといふ邊も出り人集ふ所なり幸て古風い其邊  
真の整漬の幸れとよむとて漬漬のち集に塩のさたの  
くつりともぬものなり

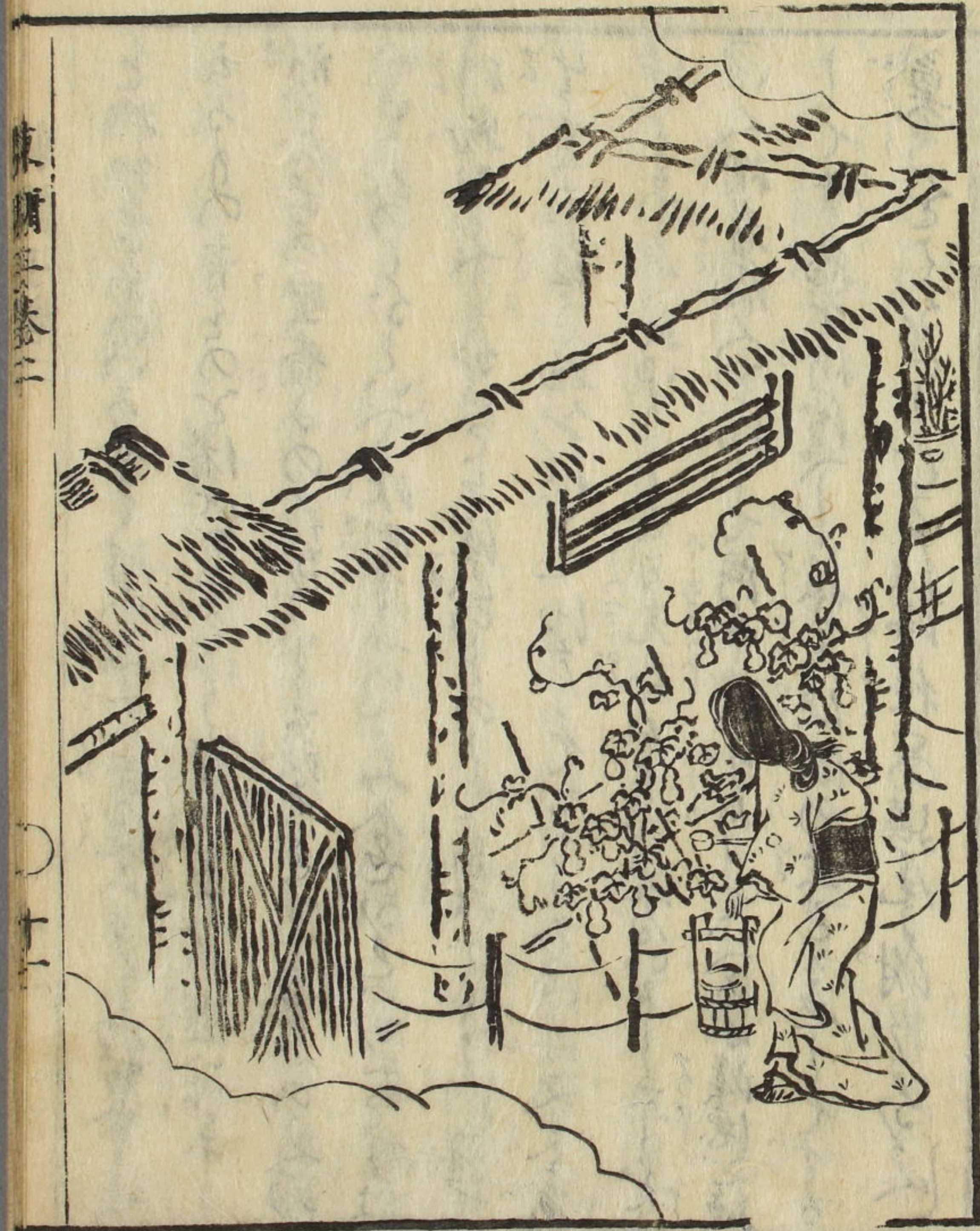
○網代の浪渚遠くが後にも浪逆せしは浪唯古きと  
るるに網代舟網代木と添てく丸のちふり

くし月とよむし月とよむ網代舟舟とよむのやうにさるる  
とて網代といふる竹島の浪真がとて浪それ網代は網  
とつる場あり今九洲そへ大洋の角小浪瀬の場とに

て海程を納て何ふが網代波が網代といつて自分く浪舟  
の網代を換わりて後月く浪舟を打これ網代あり青  
と小舟使とるる色くあふ小舟使をりくあふを後  
既の場へ人といふは夜かあひて浪人といふは網代舟と  
あふを舟の字有て換さるるなりとのさしていろをいひ  
ひ備物網がどの浪曲のさるるなり

○曾我足牙の足と十師祐成と云ふとみ師祐政といふ  
これ長初節と云ふと云ふをなうと云ふは式部備へ書  
しつと牙のみ師は小師祐政の烏帽子足と云ふは師義  
母の牙と云ふは師祐成と云ふは師義と云ふは師義の書曲と





周仙寫



と栴檀香白のいろかく研小弄花者流わたくし初頁を去  
 云るりの有とのと備此かここゆりと萬葉及新撰の帖未  
 詠と内西の堅香子の花ありしと云はれしと寺井の人の乃  
 かここのくふとて一休樹寺井のよふ念せりてはかこことは  
 何物ありてかここは海のものも七家作をくく何物とて  
 生育志松と物なれどこれゆりて一名うまゆり又文者  
 ゆりまゝとて初ゆりしと云先づそとごんをいりしとて  
 ○人相者流人の相して為命ありしとていふは法徳と通  
 して幸福を祈らば一級生は法徳の至りたる也とせける  
 奥をそとくかここし佛種子の蓮尾の附りたるありし

むけりを教とて君の悪むを力とていふ孟子曰君  
 子之於物也愛之而弗仁於民也仁而弗親と宣ひ奥は人  
 食とて耕作培養の助たりんは天是よりを授る小一尾と  
 万とみと星遠比の自然たりゆんぞこれを修らて法徳が  
 とも鳴呼りゆくいんや奥をの捕らるるを法徳は  
 左程か根根者があるるを放生とせんを却ら奥をを捕ら  
 者がゆりたるは激し流るる俗語不妄をけ捕ら  
 六年止とて人の食盡る小ありしとていふは授有るは法徳  
 施半給りたるは法悪のゆかりゆくあまんの  
 ○先天の黒鹿とて後天の文欽を生じ眉元とて

額と後て遊作妖妍の姿ふかきなり道徳に善の教を  
 諭して麗容は體の姿たるを教を以て風鑑  
 者流の道さるべし諸凡鑑家此は法と云ふ親相あり  
 と看人相さる書しと不就の字を清小相在爾室尚  
 不愧屋漏と云相さるる之相と云ふと云ふ云ふ親  
 者の字へ不為を御那代醉十五云一士子赴省誠甚愜意  
 待榜周遊僧寺廊廡有鬻相者遂和之鬻相の字は  
 去る鬻頭賣卜寺院鬻相和漢城と角と云ふは  
 ○家相大に流り都鄙賢愚こゝれ者と云ふ人多し梅ふ  
 劉済が釋名に宅托也人之屏處也として必是人の人物或は相

かどりかふりく又刀刃の鞘柄はく竹皮并竹皮に金  
 浪と樓たりとも身池刀さる竹の用を云ふや白鞘切柄  
 しては名紋と号し家相さるり四神相家の比の家  
 宅十も具足金城湯池の固ありともは備愚ふり如  
 竹七長えなり秦の始皇河房と造り二世河房と斃と全  
 家相は真履なりと云ふ爰に予遊歴中にたりしは活有  
 和州法田なる高麗家相と云ふと然る後花より家相者を  
 拓り差家と居て宅と造り十分は若相さるり西之を年  
 の万福今や来らんと傳ふらふ身と云ふさあなり割魚形  
 家断絶及びねえりが寓せし隣村は同く家相者も指せ

又中門を建たせ荒と挽きて相者の意を任せて右相満て  
 と收びしに翌年の春金象温度と病をよと相續とてさ  
 盛にの嫡子を失ひ普治を敷敷し之組傳来の任所と多た  
 了そ大不幸行ふりてり隣りてかれや物長と感いよく解  
 とさ家相と當一人ふし物しと男へちが幼きる百世りて  
 村長と物先伶俐ありりりい哀哀との所と希九府法  
 としし徒金

本曾街道は昔も今の通りく人馬は往來交りてきり。見  
 えりり流曲の心焼は發端より昔光ぞと親たのむと次才を依  
 たりてこの珍意と都の舞女伝州昔光寺道と春一城路

へびりて後わびぬのころと挽よ遠く有かりと流に昔を  
 今の葛橋番の原かざりて棧の中にくまらむ申りたやと  
 他郊のものへ渡りぬき路程ありて家小令をばかると云  
 一ざりて推美しゆらまきしを系初るる百軍よ只る伝州  
 昔光寺へ武百りし有城後地りてと作をるる一平家既  
 関楽向ふりし水陸道へ出りり本曾後をぬ向りては第一  
 本曾の自中からたて居居と經くとから平家行糧道と  
 断りては俱利伽藍より向りて本曾の坂路自中より次と息  
 けりか徳成と成り伝州より順路明らりて去りては翌年  
 武百年と本曾大のそきん断岸後壁を築りて臥舎と定

行して本多氏の所程川支の邊なく信比の士民と自兵と  
 業を有しと実道廣と所行の人はははるか  
 ○按南今更村の往古之御厨子所月々依御の村に奥  
 洞進の処より由緒有と云ふと七現直も諸役御免あり  
 御の例よりして今も石巻正月十二日に入上御所院御所  
 執極家一太朝を敷上り村長並座西人丈級と着し更内は  
 身無て京兆尹西津奉所所所れをとも席村に二件  
 古武有しりやむ祇園大宮と神興と祇園今の昔の面村  
 より加興丁と初まこれ津所洞進の項京に東江く原  
 今更村の役所を構有替ふ以下人交付と洞進の役と

初し後冷泉院の所々祇園今初るはは東江く店、  
 西へ祇園大宮と轡を是より更なるは今更村中神人  
 所也  
 丁と店より神興と昇るは例よりして今も今更り加興  
 比のりよと深没の所及渡所は信頼方所と善あり半  
 無り後と略と比のり刻方より指家更比の増刻ありして  
 諸為村より元源室氷の比七の圍の次といえる壺蘆と  
 出せり藏頭藏尾よりて帶蘆分よりた左圍の夜と号  
 人より血ありとのり七号佩よりて珠瓶と冊湖珠の緒と  
 少料と七貴冠と下所よりや信代屋のりより下り今更





佳胤  
 哇噠

て波村の壺蓋を作らば圖の夜といふ名ふある人ば  
 ○酒と飲て面色赤くおぼるものなれば厥から酒の色を  
 まくかりたるを肝の厥なりとの極色の赤くかりたる酒  
 カの脈と助り左筋透るるにて物に依り面色の青くかり者  
 と酒力と肝の脈不備と左筋を数一元来謀慮の友たる  
 肝を得う依りいろく理原を云ふ夫肝の脈は本に属せし  
 左水生本の理うと太豪飲り充て面色をれたるの由ありま  
 しの脈は火と水剋火の理にして飲ぬど猶も酒元が  
 水なりれども味辛熱の物ゆ熱物を火と口乳相旺と  
 主の脈と流絶したるを肺金熱火怒と脾土ハ土

剋水とこれをも腎水と辛熱の火と燥ハ故を肝三脈  
 と酒と流絶しと脈を酒を更なる之青赤二色と乳との  
 ○湯熱肺との火と是は法を肺との火と是は火といふ  
 故を方歩の夜の嶮岨を治す七はかばは後汗と赤  
 亡湯して骨と困睡せし夜と夢外て何事と是をわら  
 ぶらよ却らたまを是を見らかり是湯乳と云ふが左ありを  
 るるといふがらゆる此は是るると是ぶらと有釋述は是  
 と傳送減し中よりハ亦理ありか  
 體中小法湯の二乳之小流通とるるとたると之中よ  
 冷水を飲ても小法暖く極者中熱湯を飲ても小法ら

火傷セバ法の法傷二氣を治せば大過不及はけむ

○トバと妖物を母ふかしくして元姑と云ふ女を

篇とて夫と傍と次実には女の化物能く人と害し

家を破るゝとこれ國を傾くから妖物古々今地を破る

○鹿子金子權子桃子が此類にぞとて古々今子孫

と係り不射例とて今於奥州南部の民俗に此物と皆

子の字を添く移と筆子榮磁子風呂敷子といふ者

海内がて子と稱せしや

○高山輝と云清土人の室番明和の比す七船をせし介り

といふ流しと東海に着る官府より東海道をゆく

長評送りゆきり降洛小富士山を見て大い悲怖し降後

高山輝と後せし者もやは感し七願能書之商賈に

文雅の人物なりと高山輝はゆよいふる支那を去る

夷の國を巡りてに富士山のては文をいふや之は

小一七獨秀天子沖ていふて合名取と云へし諸日本

卵小腸とて此類にれ味ありし皇孫連流とて

海外に傳ふ富樫の青宵に獨歩し貨材大に富饒し

俗にしく人物あり半善夷一般に世に処ありといふ

船を慕ひ漂流の後も連年崎湯小来たりといふ

○京抄の俗名の浪カマスゴと云物を食ふ湯に圍は

濱よりむけりのかを海濱の漢人といふことありては  
やう感ひかり長じていふ物とふもやうな明なきは  
名は事しむるゆゆる田舎はみまびらきあり

○米麦粉の轉けを江州の氏俗カニといふり  
ナリといふゆふカニ漢ありありのありて五月の  
雜菜をかんと云ふ義ありいふ人古來なりん云ふを  
著といふ取らん著といふ人ごけを義といふ方  
をいふるといふ望田浦の漢者の家私を云ふカニといふ  
約羊舟なり系と東浦塞大坂と南尻家内ホラブラと  
孫といふといふホラといふ云々といふ一く  
蜜瓜なり和州といふ

○美脊小原の古氏といふこと一七ケウといふ下  
む官成りて新といふ及百姓といふ惣發ありいふ  
唯の云ふといふ下所といふ自孫なりいふこと一

○中野大郎の書代集合は百卷管家類聚國史百卷  
大同親聚方武百巻といふこと一七ケウといふ下  
習書親深といふこと一七ケウといふ下  
貴の功といふこと一七ケウといふ下  
家司休堂といふこと一七ケウといふ下

本草未考有の大詔の書也警者少して二百卷の書と稱記  
 一々編集次第根幹を瑣り下り嗚呼奎壁天に輝き  
 文運大に承りてりしゆ母老經一部と漢を空しう音  
 とん枕しやいしは原或醫の門は海多の病瘵を去り  
 一か病療作と大書してなはれと按り小醫經方書中  
 一難作しと難治はわきごと難病と云難治はわきごと  
 むじくが家業ふよひて下伝の老氏備力の野夫とて  
 書を授けりいぬしありゆり後と制介の職するは書  
 と漢ぶりと紙集うると作らるる金しとまはり  
 ○或云地黄丸の丸は字と及魂丹の丹の字は丸丹は字

の篇を或醫師と為し小詔をかくるしとわたりう記ふん  
 ○淋瀝種しとそものし浮洲と書く指風尼といふ人う柳青  
 子(送)とて衣しと衣をたれ直衣と七制とは物教号  
 是右の肩のゆき手終れ服りりかの子ゆかし指風  
 尼の姓しる未華老人と云方うりははくしり  
 此指風尼之淋瀝の上より名はやとてまらる椽し  
 しそらのまじけ涯のる集をよのまき号くはわのり  
 ころまややせ流布せむはあ  
 ○俗るふとあうりかひしとて傳は梅を美圖方と云小偶中せり  
 又空のまたるをどんりしと云(曇)はるかろくをなめり抄と

云々亦多をぢだんぞ踏しそい地糲とくしの物詰を糲  
 糲を踏容れれどかかりしそ踏研を文選の匠の踏研と  
 洞谷室又血と有血と血を洗ふしそ唐書源林が傳ふ以血  
 洗血汚穢益甚し有釜中より立み火れきを湯をいそ飯を  
 かりて一茶飯の乳(別)は医緒の湯のれ釜中に茶粒をいそ  
 ○清去の俗語(俗語)と短紀と云今長崎ふくある高貴乃  
 常に用るるをふて今日本那の高貴わいふの寂一を  
 不景れといそり中しく石紀紀りて

東嶺子卷之二終

